

## レンズのないカメラを風が通りぬける — 渡邊庸平「ジャイアントコーラス」に関するノート

飯岡 陸

レンズは像のスケールを変える。レーザーの光は臃げな輪郭を途切れ途切れに投射する。輝く線は顎、唇、鼻筋を壁面に描きだす。それはあなたの親しい人の横顔かもしれない。その巨人はいる／いないの間で存在を震わせながら、上向きにゆっくりと回転する。

かつて咄嗟に「レンズのないカメラを風が通りぬける」ことに反応したアーティストは、のちにその言葉を引用する※1。かつてのカメラ・オブスキュラにレンズはなく、そこには小さな穴だけがあった。景色は反転し、縮尺を変え、壁に映し出された。まだ誰も印画紙に焼き付ける術を知らず、そこにはただ光学的な原理だけがある。実際にピンホールを風が通りぬけるかはともかく、ここで渡邊が見たのはパースペクティブ = 光学的な原器を風という非人稱的な現象が通過する、その詩的な展望に他ならない。本展覧会「ジャイアントコーラス」が扱うのは、そうした光と空気の流れによるアレンジメントだ。

「レフ板は受け流しの特性を持っているし、坂道もそうだ。直線的に整えられた波を（突き刺しつつも）見よう」  
— 渡邊による展覧会についてのメモより

会場にはノの字形に組み立てられた造形物が反復して置かれている※2。フレームの重なりの中に、スケートボードのクォーターパイプのように反り返った壁を想像する。その中のいくつかは積み重ねられ、いくつかは壁に身を寄せている。それらの曲面は、白い壁が跳ね返す蛍光灯の光や空調設備から吐き出された暖かい空気を受け止めるように注意深く配置されている。しかし実際に壁は存在せず、蛍光灯の光、微細な風、そしてレーザーの光はフレームの中を通り抜けていく。渡邊はこうした配置を通して、全てを見渡すような経験を与えると同時に、物理現象に働きかける「不在の曲面」を鑑賞者に想像させてみせる。

展示空間には図面としてのモデルが組み立てられ、鑑賞者の想像の中では物理的な現象が立ち上がる。宇宙空間に見立てた紙片のあるところにA、別のところにBと書きつけ、紙を湾曲させ、A地点とB地点を鉛筆で貫く…。あるSF映画の中で、時空間のワープはこのように説明される。パルプでできた物理的な紙片と、卓上のみ存在する抽象的なモデルが鮮やかに結びつく。同じように、渡邊が作り出す展示空間は、現実の出来事と抽象的なモデルが交差する場となる※3。シャツを脱いで立ち去った巨人の目が全てを透かし見る。斜めに立てかけられた楕円形の木製トレーに置かれた、樹脂でできた重力モデル。

会場の2箇所に小さな3枚のリソグラフィプリントがピンで軽く留められている。それぞれに本の見開きを正面からスキャンした画像がプリントされている。本とスキャナーの間には小さなバラの棘が差し込まれている（会場には棘のないバラの茎が置かれる）。本の中では、会場に置かれているものと同様の造形物が床に積まれ、長く引き伸ばされたその影が陰影深く画面を横切る。本の山なりとスキャナーの隙間に散らばったバラの棘は、私たちの想像力を代行する矢印として、空間で羽ばたく微細な光と空気の振動を示している。ジャイアントコーラス。それはあなたを包みこむ、巨人の／巨大なコーラスについての見取り図に他ならない。

註1: 筆者がゲストキュレーターを務めた展覧会「EXPOSED#9 passing picture」(G/P gallery, 2015年)アーティストトークでの出来事 (<https://sites.google.com/site/theexposed9passingpictures/7-18-afutatoku>)。同じく出展作家であった山内祥太の発言に反応し、のちに展覧会「猫の肌理、雲が裏返る光」(駒込倉庫、2017年)の中でそのフレーズを引用している。

註2: 同様の造形は、インスタレーション作品《FOR FRONT, REAR, RIGHT AND LEFT》(2018)で初めて登場した。ここでも同様に上空からの空気の流れを受け流すための形態として機能していた。

註3: 例えばグレゴリー・ガリーは宮澤賢治論の中で、地図に私という視点を抜け出して空間を把握する機能を見出している。「どんなに単純な地図でも、その空間の中に、それによって包み込まれている自分自身を「思い描く」ように要請すると同時に、それが表わしている空間を超越するようにと、全体を理解する(つまりわれわれの身体の知覚的限界を克服する)ようにと、われわれに求める。この存在論的二重性は、アメリカのどんなショッピングモールにも見受けられるほとんどのフロア・マップに添えられた飾りけのない言葉で捉えられている。「ここにいます You Are Here」。それに相当する日本語の「現在地 You Are Here」は時間軸をつけ加えて、地図の驚くほど多くを要求する形而上学をさらに強調している」。グレゴリー・ガリー『宮澤賢治とディープエコロジー』佐復秀樹訳、平凡社、2014年、58-59頁。